対象関係組み替え過程としての「ひきこもり」と〈回復〉
―当事者の語りと支援実践から―

"HIKIKOMORI" and Recovery by Object Relations Theory:
Based on Narrative of the Parties and Support Practice

首都大学東京大学院　原　未来　HARA Miki

生活指導研究　２９号　抜刷
２０１２年

対象関係組み替え過程としての「ひきこもり」と〈回復〉
―当事者の語りと支援実践から―

"HIKIKOMORI" and Recovery by Object Relations Theory: Based on Narrative of the Parties and Support Practice

首都大学東京大学院　原　未来　HARA Miki

はじめに

「ひきこもり」が高い社会的関心を集めて10年余りが経つ。犯罪リスクとして社会問題化した「ひきこもり」は、その後、若者問題、家族問題、精神医療問題など、様々な問題として語られてきた。さらに2000年代半ばからは、「ニート」概念と一部混同されながら就労問題としての捉えられ方を強固にしている（工藤 2008）。「ひきこもり」やその〈回復〉のあり方は、就労や対人関係の獲得など外部の指標によって把握されるようになり、当事者にとっての主観的な経験として「ひきこもり」を捉える視点はそぎ落とされていった。

こうした動向に警鐘を鳴らしたのが石川良子である。石川（2007）によれば、「ひきこもり」当事者は生きることや働くことの意味、自分自身の存在を徹底して問うており、それはA．ギデンズがいうところの存在論的不安の感覚に結びついているという。ギデンズ（1991=2005）は、絶対的な拠り所となる権威や外的基準が減退する後期近代にあっては、すべての者に、自己物語を再帰的に作り上げ独力で自らの人生を意味づけていくことが求められていると述べる。「何をすべきか？どう振舞うべきか？誰になるべきか？」といった実存的問題に、「無意識や実践的意識のレベルで『答え』をもっている」ことが存在論的安心につながり、逆にそれに「答え」を与えられず、実存的問題を意識せざるを得ない状態にあることが存在論的不安を引き起こす。石川は、「ひきこもり」を、実存的問題を問わざるを得ず、存在論的不安の渦中にある状態とし

て捉えた。そして、社会参加という外部の次元に回収されない、存在論的安心の確保という〈回復〉目標を提起している。それは、生きることへの覚悟をもつこと、生きることや働くことの意味についての“納得”を手に入れることだと説明される。就労しない（できない）という外部の指標から「ひきこもり」を捉えようとする動向へのアンチテーゼとして、石川は、当事者の内部で起きていることに光を当て、「ひきこもり」とその〈回復〉を論じる際の中核に当事者の経験や葛藤感覚を位置づけたのである。

しかし、当事者の経験に注目するとした石川においても、当事者の葛藤それ自体についての十分な検討はなされたとは言い難い。当事者の葛藤を実存的問題への対峙としてひとくくりに捉えているため、葛藤の内容・構造への詳細な洞察を持ちえないからだ。たとえば、「普通」とオルタナティブな生き方との間で逡巡する当事者の様子が随所に描かれているものの、その葛藤がもつ構造は明らかにされず、葛藤に“納得”を見出していく変容プロセスも—それを石川は〈回復〉としているのだが—明確にされていない。当事者の主観的経験から「ひきこもり」を明らかにしようとするならば、より当事者の葛藤そのものに着目できる理論枠組みから分析する必要があろう。

そこで、本稿では対象関係論を手がかりに考察を試みる。対象関係論は外界に実在する外的な対象だけでなく、個人の精神内界に形成される内的対象との間で発展する内的対象関係を重視する理論である。これまで、不登校をきっかけに学校とは何か、自分とは何かという根源的な問いに苦悩しつつも新たな自己を形成していく子ども・青年を理解する際に用いられてきた（横湯 2002）。それら不登校研究で明らかにされてきた知見と「ひきこもり」の者たちの語りや状態には一定の重なりが見られており、「ひきこもり」当事者の葛藤や揺れ、さらにはその変容を、内的対象関係に着目し分析することは、かれらのかかえる葛藤についての理解を深めることにつながると考えられる。当事者の主観的経験を軽視してきた従来の「ひきこもり」議論に対する石川の問題意識を踏襲しつつ、対象関係論を手がかりに、より当事者の葛藤感覚に焦点化し「ひきこもり」とその〈回復〉を同定しなおすことが本稿の目的である。

また、上記課題を明らかにすることによって、「ひきこもり」支援実践への視座を引き出したい。近年展開されている支援政策の多くは、民間支援団体への委託・連携によっておこなわれており、今や民間支援者は「ひきこもり」支援の中核的担い手となっている[1]。しかし、その支援実態は団体によって様々であり、就労問題としての「ひきこもり」論が大勢を占めるなかで支援のあり方が規定されてきた面も否めない。「ひきこもり」とその〈回復〉を当事者の

経験や葛藤から捉えなおしたとき、支援現場においてどのような支援の可能性が考えられるのか、その方向性に言及したい[(2)]。

以下では、まず1節で本稿における対象について示す。その上で、2節では当事者のかかえる葛藤を整理し、対象関係論的視点からの分析を試みたい。対象関係組み替え過程としての「ひきこもり」を描き出し、石川の述べた存在論的不安との重なりにも言及する。続く3節では、「ひきこもり」からの〈回復〉について論じる。〈回復〉に際して重要となるものを提示し、実際の支援現場において〈回復〉がどのような過程として生じうるのか検討をおこなう。本稿を通じて、当事者の経験や葛藤から「ひきこもり」とその〈回復〉過程を捉えなおし、「ひきこもり」支援に際してのパースペクティブをひらきたい。

1　支援機関の概要と対象者について

本稿は、首都圏内で若者支援を展開するNPO法人（以下、団体Zと記す）での参与観察およびその利用者へのインタビュー調査に依拠している。

団体Zは1970年代から地域の子どもの発達・教育支援をおこなってきた団体である。自治活動を通じて学び励まし合う学習集団を育て、自分らしい進路を切り開くための学びを子ども・親とともに創り出すことが目指されてきた。90年代からは不登校支援を手掛けるようになり、さらに近年ではこれまで蓄積してきたノウハウを基盤に、若者支援の行政委託を受けるようになった。若者支援は、相談事業、アウトリーチ（訪問支援）、フリースペース、就労体験など多岐にわたり、年々拡充傾向にある。筆者は2009年4月より週2～3日程度、非常勤職員として若者支援部門の一端にかかわり、参与観察を続けてきた。

本稿では、団体Zでおこなわれている語る会という支援実践の記録を主として用いる。語る会は、「ひきこもり」経験やそこからの〈回復〉過程を話し合い、交流する場として設けられたクローズドの会である。「ひきこもり」の若者をかかえる家族や支援関係者の集まるセミナーで、自らの経験を話す本番に向けての準備会として発足した。団体Zを利用する「ひきこもり」当事者4名と筆者を含む支援者2名が参加し、2009年6月から10月にかけて、2時間程度の会が計7回と、3回の本番がおこなわれた。本稿では、上記語る会に参加した若者3名を対象者とした[(3)]。

ところで、団体Zでは、これまでにも語りを用いた実践が不登校支援の文脈

でおこなわれてきた。支援者らによれば、その実践の意義は孤立無援感を打破することにあるという。それは、心的外傷を負った者の回復過程において、「似通った試みに遭った人たちとの出会いは孤立感、恥辱感、スティグマ感を洗い流してくれる」というＪ．ハーマン（1992=1999）のグループの重要性をめぐる指摘を土台にしている。団体Ｚでは、不登校・ひきこもりによって社会のレールから外れたように感じている者たちの無力化を防ぐ支援方法と見なされてきた。また、自らの体験を言語化することで、過去を相対化する自分を創り出していくことも重視されている。その点では、「自己は語ることによって構成され、語り直すことによって再構成される」「しかも、それは単なる独り言であってはならず、会話というかたちをとって社会的に承認され共有される必要がある」というナラティヴ・セラピーの議論にも依拠している（野口 2005）。

以上のように、語る会は支援の場であり、後にも述べるように、そこでの対象者らの語りは様々なバイアスを受けている。しかし、かれらの「ひきこもり」経験と〈回復〉への実感は、似た立場にある者との応答や長くかかわってきた支援者とのやり取りを以て触発され、言語化されていった面を含む。そのため、上記を、かれらの主観的経験を捉える際にもっとも適したデータとして採用した。また、対象とした３名の若者へのインタビューデータも補足的に用いている。2009 年 10 月から 12 月にかけて、２～３時間の半構造化インタビューをそれぞれ１～３回おこなった。

最後に、対象者らの特性について簡単に触れておきたい。本稿で対象とするのは、20 ～ 30 代の男女３名である。みな就学・就労といった場から離れ、他者とのかかわりを避けていた時期をもつが、その期間は半年ほどから 10 年近い者まで様々である。親もしくは本人自らのアクセスによって支援機関の利用に至っており、団体Ｚの利用歴は半年から３年程度であった。その間、就労体験、フリースペース活動など複数のプログラムに参加しており、2009 年６月の語る会開始時点で３名とも団体Ｚを通じて何らかのアルバイト活動をおこなっていた。

補足的になるが、本稿では自らを「ひきこもり」と関連付けている者を当事者と呼んでいる[(4)]。対象者らはみなアルバイト等の社会参加・就労を果たしていたが、「〔ひきこもり・ニートという問題を〕抜け出た状態ではまだないと思う」（Ａさん）という語りにはかれらの当事者性が垣間見える。「ひきこもり」経験を語ることへの抵抗が低く、その総括をすることが支援上意味あると思われた層に支援者が声掛けをおこない、語る会参加に至っている。

また、対象者らは共通して親学歴が高く、家庭の社会経済的地位も比較的高

い者たちであった。従来「ひきこもり」は中流家庭出身の者たちの問題とみなされてきたが、その見解は本稿対象者とも符合する。しかし、近年、支援機関に至らず把握されてこなかった低階層の「ひきこもり」の者への注目が高まっており、その点からも、本稿で取り上げる「ひきこもり」当事者らの様子とその考察は、当然のことながらすべての「ひきこもり」の者たちの状態を捉えるものではないことを明記しておく。

2　対象関係論からみる「ひきこもり」

1．当事者の「当たり前」をめぐる葛藤

はじめに、「ひきこもり」経験をめぐって語られた対象者らの葛藤の様子を見ておこう。

Aさん（32歳女性）は、有名私立大学に進学後、単位が取れず留年したことをきっかけに徐々に自宅にひきこもるようになった。友達が4年で大学を卒業し就職していくのに対し、自分はどんどん「おっきな道」から外れ「友達と違う人」になってしまったことがつらかったという。「学校を卒業して企業に就職するのが当たり前」で、「それができなかった自分は落ちこぼれだし、ダメな人間だし、価値がない」と思ってきた。「こんなダメな自分だからどうでもいい」と自室にこもる生活を長く続けた。団体Zには心療内科からの紹介で来所し、フリースペースを利用しながら、ほどなく団体Z内で利用者向けパソコン講座の講師（有給）を始めた。

学生時代から現在に至るまでの「ひきこもり」経験を話すなかで、Aさんからは繰り返し大卒後企業就職するという「レール」から外れたことが「惨め」だと語られた。アルバイトを始めてからも、「何しているの？って聞かれたときに、パソコン教えてるのって言える。言えることをやってるのが安心」な一方で、正社員ではなくフリーターであることへの周囲の目が気になるという。学生時代、フリーターは「ぷらぷらしてる人」のイメージで、「自分が乗るところじゃないと思ってた」からだ。「ちょっと踏み外すと、どんどんどんどん、わき道に逸れていっちゃう」と過去を振り返り、「努力をしなかったことの後悔」があるという。

しかし一方で、「どうして〔正社員に〕なりたいのか、今わかんなくなってきちゃってる」とも話し、正社員にこだわる自分への戸惑いも感じ始めている。正社員になれば近所や親戚の「目線が怖くなくなる」気がするが、それは「た

だ、〔正社員という〕ブランドがほしいだけなのかな」と逡巡する。また、パソコン講師のアルバイトでは、「〔利用者の〕一人ひとりがだんだんちょっとずつ会話をするようになってきたり、あと表情が変わってきたり、っていう変化が見られることがすごく楽しい」と感じている。「こういうのを楽しいんだなって思う自分がいるっていうのを初めて知って。こういう生き方も面白いんだなって思った」と話す。以上からは、「当たり前」の「レール」に「できることなら戻りたい」という後悔や逸脱感覚と、そこにこだわる自分への違和感や現状を肯定する思いの間で揺れているAさんの様子が見て取れる。

他方、Bさん（28歳男性）も逸脱した自分の存在を強く感じてきた一人だ。いじめをきっかけに中学不登校になって以来、人が怖くて家から出られない日々が続いた。19歳からはアルバイトを始めたが、「自分は悪く言われてるんじゃないか」と思い、人の視線が気になって仕事に集中できない。不登校・ひきこもり状態を知られることを恐れ「壁を作っていた」ために、職場にも溶け込めなかった。数か月から1年ほどアルバイトをしては自宅にこもる生活を繰り返した。

Bさんからは「普通は」という言葉が多く聞かれた。たとえば、「高校くらいまでは行くのがやっぱ普通」だ。中学にも行っていないことへの「コンプレックス」がある。また、団体Zの紹介で保育のアルバイトを始めたが、その生活は「世間一般の27・8〔歳〕とは〔レベルが〕違う」と感じている。「やってることとか仕事内容とか、自分がじゃぁできるかって言われたら、…まぁ無理。無理だけど、でも普通はみんな〔もっと難しいことや仕事っぽいことを〕やってる」と話す。不登校だった頃からアルバイトをおこなう現在に至るまで、Bさんは一貫して「普通じゃない」自分という存在への苦しさをかかえている。

しかし一方で、「そろそろちゃんと就職しないといけないのかもしれないけど、まぁもうちょっといいかな」とも感じ始めた。以前は「行かなきゃ」という思いから受験しようとしていた専門学校も、「やりたいことができたらすればいいかな」と話す。人の視線が気になっていた症状が和らぎ、フリースペースなどでも「元気」になったというBさんは、「やっと活き活きというか、自分を取り戻せたから、〔就職は〕もうちょっとこれを満喫してからでもいいかな」とも話している。

以上二人に見てきたような、「普通」は“こうあるべき（あるはず）”という規範的な意識とそこから外れた状況に苦しむ当事者の語りは、本稿対象者以外にも多く確認されている（たとえば石川2007）。「当たり前」「世間並」「本来の軌道」など、それは当事者間で異口同音に聞かれる。また高い共通性が見ら

れる「ひきこもり」の遷延化過程の議論においても、就学や就労を自明視するような社会環境とともに当事者自らもそれら社会的規範を強く内面化しているがゆえに、周囲からのまなざしに怯え社会関係からの撤退が進んでいくとされ、同様の感覚が指摘されてきた（塩倉 2003）。つまり、ひきこもった当初からその後まで（さらには社会参加をするようになっても）長期間にわたって「ひきこもり」当事者には、当然“こうあるべき”という規範的な意識と、それに反する自身の逸脱状態への苦悩がかかえられているのである。さらに、本稿の対象者らに特徴的なのは、それら苦悩と同時に、逸脱的な自分やその生き方を受け入れ始めているかのような語りが見られる点である。その感覚は大きな揺れを伴っており、語りの中でしばしば矛盾を顕在化させていた。

2. 対象関係組み替え過程としての「ひきこもり」

以上のような矛盾を伴う当事者の感覚は、対象関係の組み替えプロセスとして捉えられるだろう。P．ブロス（1962=1971）によれば、青年期の初期段階において、「同性の仲間たちとの親密な理想化された友情の高まり」が生じ、「一次的愛情対象〔親〕からの分離を繰り返し試みる時期」が始まるという。親という早期依存対象の喪失とそれに代わる新たな対象の発見は、単に親から友達・異性愛的対象への関係強度の移行を示すだけでなく、支配・依存的関係性から共存的な関係性へといった対象関係の質的組み替えをも含んでいる。そのなかで青年は内的経験や自己発見への傾向を強め、新しい価値への手さぐりをおこなっていくとされる。

同様のことは、横湯（2002）によって「内なる他者の組みかえ」と表現されている。「人は『内』なる他者の目によって『世界』を見、自己と相対」するのであり、内なる他者の目の原型は最重要な関係にあった親の目である。生を励ます「眼」もあれば、要求・監視し追い詰める怖い「眼」もある。支配的な内なる他者を組み替える作業は、竹内（1987）によって「自分くずし」「自分づくり」と呼ばれたことに象徴的なように、それまでの自己を解体し再編成・統合していく過程である。

ひきこもった当初からアルバイトを始めた現在まで、対象者らが感じ続けてきた否定的視線は、支配的な内なる他者が自らをまなざす視線であろう。Aさんは、父方祖母の「評価」を気にする母親を気遣い、母からの「いい子になりなさい、っていうプレッシャー」に同調する中で支配的な対象関係を形成してきたものと思われる。彼女の持つ大卒後に企業就職するという「レール」イメージは、学力・忠誠競争、さらには企業の提示する生活様式への同調競争に家庭

が駆り立てられていくなかで（竹内 1987）、“こうあるべき”ものとして内面化された面を含むだろう。支配的な内なる他者の目は、Aさんに「レール」から外れた「価値がない」自分を繰り返し想起させ、時に彼女をひきこもらせ続け、現在に至っても正社員という立場へと駆り立てている。

しかし一方で、長く圧倒されてきた内なる他者への違和感が「そんだけ〔フリーターを〕変な目で見てるんでしょうかね」といったかたちで語られ始めている。団体Zで似た状況にあるメンバーとの交流を重ねるなかで「今の私が認められてるんだなぁっていう気持ちになって、…これで大丈夫なんだ」と思うようになったAさんにとって、承認を与えてくれたメンバーをも否定的にまなざす視線になりうる内なる他者は解体されつつある。「レール」には乗らないものの、「相手をよく見たり、自分のことも見てもらえるし、こういうゆっくりした〔今の〕生き方も楽しい」と話す。彼女は、新しい価値を発見しつつあり、“こうでなければならない”という支配的な対象関係を組み替えつつある。

それは、Bさんにおいても同様だ。「やっぱ普通じゃないのかな」と常に不安に思ってきたBさんは、団体Zに来所した当時は変わりたい一心で焦っていたという。しかし、「今はもう別にいいかなー。そんなに焦んなくても」といい、「自信ないんですけど、でもなんとかなるんじゃねーっていう」感覚があると話している。「楽になった」と現状を語るBさんの様子は、支配的な他者を解体し、あるべき「普通」像へのこだわりを和らげ始めたようにも見える[5]。

以上のように、当事者の語りの揺れや矛盾は、対象関係の組み替え途上ゆえに生じているものと捉えられる。それは、どう生きるのかという問いをめぐって、内なる怖い他者の目から想起される、あるべき自分からの逸脱感覚・苦悩をかかえながら、他方で新しい価値と生き方を模索し支配的な対象関係を組み替えていく過程である。石川は「ひきこもり」を実存的問題への対峙による存在論的不安の状態として捉えたが、より詳細なプロセスに着目して言えば、それは対象関係組み替えの過程と言いなおせるだろう。さらに、石川が述べるようにそれら実存的問題をめぐる葛藤に折り合いをつけ、“納得”を見出していくことを〈回復〉とするならば、葛藤の源泉にある支配的な対象関係を組み替えて安定的な対象関係を築くことこそが、「ひきこもり」からの〈回復〉に他ならない。しかし、〈回復〉をめぐる議論は支援実践と関連づけながら3節で扱うこととし、以下では今一度、石川の提起した存在論的不安としての「ひきこもり」という捉え方と対象関係組み替えとの関連を考えておこう。

3. 後期近代における対象関係組み替えの過程

Ｃさん（25歳男性）の場合を見てみよう。Ｃさんは、幼い頃から人との関係や物事に対する行動面で「自分を出せない」感覚をかかえてきた。物心つく前に父親を亡くしており、懸命に頑張る母親は「心配性」でよく干渉してきた。そんな母とぶつかる兄に対し、Ｃさんは「自分の不満を〔母に〕言っても、結局なんか一般論みたいので言われて。抑え込まれちゃう」感じだったという。「親が二人いればこっちで突き放しても、そこの二人の世界で何とかなりそうだけど、一対一の世界で突き放しちゃうと、もうなんか、こっちが悪いことしたのかなっていう感じになっちゃう」と話す。

中学・高校に入ると友達関係の中でも自分を出せず、「無理して、明るい方にいかなきゃ」というしんどさを感じてきた。「10代後半から20代前半にかけて、何もできなかったなっていう感じ。何もしなかったっていうか」といい、「やらなきゃいけないっていう感覚がすごく強くて、自分がやりたいと思うようなことがなかった」と話す。「行くもんだと思ってた」ために大学に進学したものの２年で退学、その後自宅にこもりがちになり「無気力になって」いった。そのつらさをＣさんは「主観がなくなる。客観に合わせちゃって生きる」と表現する。

Ｃさんを「やらなきゃいけない」ことへと抑え込む支配的な対象関係の原型は母親にあったと思われる。ただし、問題はその支配的対象関係を放棄し新しい関係の構築をおこなうことが困難であった状況に見るべきだ。新たな対象関係構築の際にもっとも重要となる友達関係は、今日、「イケ面、明るい、部活のリーダー等々のさまざまな要素を加味した一人ひとりの『価値』が判定されて」形成される「友だち階層性」と呼ばれる上下差に支配されている（中西2009）。消費文化世界を背景としたそのような思春期友達関係は、Ｃさんの「自分を出せない」あり方を友達関係にも投影させ、ますます支配的対象関係を強化していく土壌となった。

中高時代から続くＣさんの「主観がなくなる」つらさは、その後、母に連れられ団体Ｚに来所し工場でのアルバイトを始めてからも続いた。仕事に気持ちが向かず「苦痛」でしかなかったというが、そんなＣさんの転機となったのは、アルバイトを辞めると上司に掛けあったことだったという。「〔辞めたいと〕言えなかった頃は毎日上司の言うことをただ聞いて、自分からは何もしなかった」が、「嫌だって言えるようになったことが、自分としては、初めて主体的に動けたこと」だったと話す[6]。上司との話し合いを経て、最終的にアルバイトを続ける決断をしたＣさんは、「主体的に動ける自分」をつくりたいと自ら

目標を定め、団体Ｚの手伝いなどを始めた。そのなかで徐々にやりたいことが出てきたというが、一方で、「自分のやってることに、意味っていうか、意義がもてない」という感覚や「こんなことしてていいのかっていう不安」も感じているという。

ひきこもった当初からアルバイト就労を果たした後も、Ｃさんの「客観で生きる」ことへのつらさと、そこから「主体的に動ける自分」をつくろうとする試みは続いている。それはまさに支配的対象関係の組み替え過程であり、「『自分の道』と信じる決定」（Blos, P1962=1971）をおこなう主体を構築していく過程だろう[7]。それは、「やらなきゃいけない」という支配的な内なる他者に長らく圧倒されてきた反動を伴う分、より自らが「やりたいこと」を主体的に選び取ることに重きが置かれる。そのため、本当に「自分の身にな」ることなのかどうか悩んだり、「仕事をやってる意味がわからない」と感じたり、「なんでこんなことやってんだろうと立ち止まってしまう」といったかたちで、自らの選択やその意味を問う作業が多く生じているのである。それらは、先のギデンズの議論と重ね合わせれば、存在論的不安の状態とも言えるだろう。つまり、Ｃさんの「ひきこもり」をめぐる経験は、対象関係の組み替え過程であり、主体を築き上げるプロセスであるが、一方で、支配的な対象関係をくずし主体的に動ける自分をつくろうとするほど、自らの選択の意味を問うて実存的問題を直視せざるを得ず、存在論的不安へとさらされてしまうのである。

外的基準が減退し、何をすべきか、どう生きるべきかといった実存的問題が浮上してくる後期近代にあっては、この問題を括弧に入れ無意識・実践的レベルで“答え”をもつことで存在論的安心を保つことができる。しかし、支配的対象関係を脱し新たな対象関係を築く過程では、自らの人生を生きる主体としてのあり方を形成・発揮していくことが、ともすれば実存的問題への対峙となってしまう。すべてを自前で意味づけていかなければならない後期近代において、対象関係の組み替えは、存在論的不安に巻き込まれるリスクを伴うものとなっているのである[8]。

3 「ひきこもり」からの〈回復〉過程

1.「ひきこもり」からの〈回復〉とは

「ひきこもり」を、石川（2007）のように存在論的不安として捉えるにせよ、本稿のように対象関係の組み替え過程と捉えるにせよ、その中核に据えられる

のは生きることや働くことをめぐる当事者の葛藤感覚である。当事者の主観的経験から「ひきこもり」を同定すること、また、当事者が自らの葛藤に折り合いをつけていくことを〈回復〉と見なすことにおいて、本稿は石川と立場を同じくする。しかし、その〈回復〉に際して重視するものをめぐっては、両者には差異が生じている。言い換えれば、そこに存在論的不安としてではなく、対象関係組み替えとして「ひきこもり」を捉えることの意味がある。

まず、存在論的安心の確保という〈回復〉を掲げる石川は、〈回復〉に際して問うという営みの重要性を述べる。その営みは、日々の生活やルーティーンとの対比の中で取り上げられている。ギデンズ（1991=2005）によれば、存在論的安心は何よりも日々のルーティーンによって維持されており、実存的問題に対する“答え”は「基本的に行為のレベルに位置づけられている」という。石川は、支援論において見られる「とりあえず働いてみる」というアプローチを、ルーティーンを立て直すことで実存的問題への実践レベルでの“答え”を獲得し、存在論的安心を維持しようとする方法だと捉えた。そして、それに対置するかたちで「真正面から」実存的問題への問いに取り組むアプローチが、〈回復〉過程においてもっと尊重されるべきだと述べている。実存的問題を執拗なまでに問うことは当事者にとって必然的な行為であり、実存的問題に「折り合いがつけられて初めて、日々のルーティーンが有意味なものとして立ち現れてくる」という指摘からは、まずもって問うことの重要性が強調されている様子がうかがえる。

一方、対象関係の組み替えとして「ひきこもり」を捉える本稿で重視するものは異なる。まず、かれらの葛藤の源泉が支配的対象関係にあることを踏まえれば、〈回復〉とは、支配依存的な内なる他者を解体し、安定的・主体的に生きられる新たな対象関係を構築することで葛藤を緩和・解消していくことと考えられよう。とすれば、論理的には、〈回復〉過程に際してもっとも重要となるのは、対象関係組み替えの拠り所となる新たな対象の存在ということになる。ここには、問う・語るという営みも大きくかかわってはくるものの、後述するように、それは石川が重視する問う行為のイメージとはやや異なっている。以下では、対象関係論上先のように仮定できる〈回復〉が、実際のケースや支援実践からどのように捉えられるか検討をおこなう。

2. 語られた〈回復〉へのストーリー

まず、当事者自身は〈回復〉への道筋をどのように捉えているのか、描き出してみよう。

Aさんの場合、ひきこもり生活からの「一番初めの大きな動き」は心療内科への通院だったという。そのきっかけとなったのはネットゲームでの人との出会いだ[9]。「〔ゲームのキャラクターである〕自分を強くしていかないと、遊んでもらえな」いためネットゲームの世界でも「必死だった」というAさんは、そこで「私自身のことを見てくれているんだな」と思える人に出会い、「すごく救われ」たと話す。これまで自分自身を見てもらえた感覚は「あんまりなかった」ため、「強烈だった」。その人の話を聞くうちに、「外の世界に自分も出たいなって思うようになった」という。

団体Zを利用するようになってからは、「レール」と異なる生き方を知った。それまでは、「レールの上の社会しか知らなかったから、はみ出ちゃったら行く場所がない。行く場所がわからなかった」が、NPOで働く職員などの様子を見ながら「いろんな仕事がある」ことを実感したという。「〔前は〕周りにいた人と同じような世界に行かなきゃいけないと思ってたんだけど、今は自分のできることとかやりたいことから始めればいいんだなって思うようになった時に、…今までの〔ことを〕認められるような気がし」たと話している。

一方、Bさんの場合、「元気」になった転換点は支援員との面談だったという。自分の感覚をすべて話したところ「普通だよって言ってもらえて」、そこで「すごいどんよりしてたのが一気にピカーンって晴れた」と話す。「なんか意外と〔自分は〕普通じゃん、普通だったんじゃんって感覚」を持って以降、フリースペースでも「自然体の自分」でいられるようになった。その明るい雰囲気にメンバーからも「はじめはそんなんじゃなかったですよね？とか言われ」ており、「こんなに変われると思わなかった」と、他者に映る自分像への驚きと手応えを感じている。

Cさんの場合は、先に見たようにアルバイト先での辞めたいという意思表示が転機として語られる。その際、「話を受け止めてくれる感じ」で「頭ごなしに否定してこない」支援員とアルバイト先の上司の存在が大きかったという。初めて主体的に動いた感覚は「すごく気持ちよ」く、その経験後から「自分でやりたいっていうのもいろいろ出てきた」と振り返っている。

AさんやCさんの場合、転機を支えた人は、それまでの支配的・干渉的な他者と対比的な対象として語られている。また、Aさんにとっては、「レール」上の世界とは異なる働き方もまた、これまでと異なる価値を体現する対象の発見であったのだろう。これらは、「ひきこもり」を対象関係組み替え過程として捉えることで、改めて〈回復〉の際の重要なファクターとして位置づくものであろう。

3.〈回復〉を支える支援実践

次に、かれらの〈回復〉過程を、それを支えた支援実践とのかかわりから見ていこう。

まず、対象者らの先のような語りは、それ自体が〈回復〉への過程だと言うこともできる。自己は、無数にあるエピソードを取捨選択し意味づけることによって生み出されており、その配列の視点や意味づけが変われば、異なる自己（物語）が立ち現れる。すなわち、〈回復〉へのストーリーを語ること自体が〈回復〉した自己を創り出すのである。

語る会では、支援者の働きかけによって度々〈回復〉してきたと思える実感に焦点が当てられた。そうした実感を積極的に取り上げ語らせる様子は、語る会中盤時期における次のようなやり取りにも見て取れる。

支援員：〔レールから外れたことは〕今でもやっぱキツイ？
Aさん：……うーんきつくはない。その当時きつかったかどうかってこと？
支援員：いま
Aさん：…（長い沈黙）…できることなら、そっちのレールに戻りたい。
支援員：戻れそう？
Aさん：今は無理。
〔略〕
支援員：でもそれにさいなまれてないじゃん？
Aさん：うーん、じゃぁそんなに悩んでないのかもしれない。
支援員：なんでそうなれたの？
Aさん：えー。できないことを追ってても、生きてけないかなって思った。
支援員：しゃーねーかーって、そんなことを追ってもって。ある意味それ諦めつけたってことじゃん。どうやって諦められたの？
Aさん：えー。諦めたくないですよ、まだ。まだって言ったら変だけど。うーん。ホントならあっち側にいきたい、けど。んー……いろんなことをやってる人がいるっていうのを知って。その、目指していたもの以外、のことをやる自分もありなんじゃないかなってちょっと思った。

〔第4回語る会〕

このやり取り以前の語る会において、Aさんは「レール」上の生き方へのこだわりや、その一方で「レール」から外れる現状を肯定する思いを端々で語ってきていた。上記のやり取りは、これまで語られてきたそれら断片的で部分的

な相反する感覚を一つの土俵に乗せ、意味づけようとする支援者側の意図が表れたものだ。「諦められた」自分を積極的に語らせる支援者の働きかけは、Aさんにとって出現しつつある新たな感覚への気付きや新しいストーリーを創り出す契機となり得ている。

ただし、このような支援者の働きかけが、当事者の部分的な実感を肥大化させ、美しい〈回復〉のストーリーへと収斂させていってしまう危険性をはらんでいることには十分な留意が必要である。実際、この後もAさんの語りは「レール」へのこだわり・つらさと現状肯定の間を行きつ戻りつした。その意味で、先に見た〈回復〉へのストーリーは揺れ動き迷いのある語りの中の一部分に過ぎない。他ならぬ当事者自らが葛藤に折り合いをつけることが重視されるべきこと、それは短期間で成されるものではないことは特に強調されてよいだろう。

また、このような〈回復〉への語りを支え促す、語る会実践の背景にあるものとして注目しておきたいのは、対象者らがみな様々な支援プログラムを利用する中で多くの試行錯誤を繰り返してきていることだ。Aさんはパソコン講座に出席しそこで「自信」を得た後に、利用者向けパソコン講座の講師をおこなっていた。Bさんは保育アルバイトをするかたわらフリースペース活動にも多く参加し、メンバー同士での交流を楽しんでいた。Cさんは仕事体験プログラムを経て工場でのアルバイト就労を果たした後、さらに並行して団体Zでの手伝いを始めており、スタッフ補助の役割を担いつつあった。それぞれが団体Z内外で様々な体験を繰り返してきており、語る会は、その感覚や思いを言語化し意味づける場であった。そこでは、実存的問題を抽象的に問い続け“答え”を見出そうとするのではなく、具体的な経験や日常生活・活動を基盤にしながら問うという営みを展開することが試みられている。石川は「真正面から」実存的問題を問うことの重要性を述べているが、対象者らの語りからは様々な体験のなかでの感覚を土台にすることで、改めて問うという営みが生成されている側面もうかがえる[10]。

また、問う・語りを紡ぐという営みが〈回復〉へのインパクトとなってはいるものの、その語りには実際の他者関係が影響していることも指摘しておきたい。たとえば、先に見た支援者とAさんのやり取りが一定の強引さを含みつつも可能となっているのは、長期にわたって形成されてきた両者の関係性があるからだろう[11]。さらに、語る会が似た経験や痛みをもつ仲間に聞き取られ共感される場であったことも重要である。回を追うごとに、共感や当事者同士の相互交流の様子が見られていったのは、他者の語りや応答の存在が自らの語り

に影響し、問う営みへとつながっていたことの表れだろう。このような共に問うていくあり方や問う背景にある他者関係もまた、個々人が内面を掘り下げていく問い方を想定する石川においては言及されないものである。

こうした本稿と石川の差異は、石川の存在論的安心という〈回復〉の捉え方における以下の疑問と対置したときにより鮮明となろう。石川が〈回復〉として掲げた存在論的安心は、当然のことながら一度確保すれば済むものではない。実存的問題に答え続けることで安心が確保されるということは、逆に、答えを見失い再び存在論的不安に巻き込まれていく危険性と常に隣り合わせということでもある。外的基準が減退し実存的問題が浮上する後期近代という時代だからこそ「自分なりの“答え”を出していく」ことが重要な意味をもつという石川の議論は、一方で、常に意味を問うことを強い存在論的不安を掻きたてる後期近代という社会環境に組み込まれ、それを再生産することに寄与してしまう。Cさんに見たように、意味を問うこと自体が「大変」さや生きづらさを生成している側面があるとすれば、そうした枠組みに乗ることで〈回復〉を捉えてよいのか疑問が残る[12]。

語る会実践はそうした疑問への一つの回答となりうる。というのも、語る会における語りは決して一人で問うことで意味づけや“答え”を得ていく過程ではないからだ。仲間と共に語りを聴き取り・聴き取られるなかで自らの生き方を模索するあり方は、独力で人生を意味づけていくことを強いられ存在論的不安にからめとられていくスパイラルから距離をとる上で、重要な意味を持つと思われる。

おわりに —「ひきこもり」支援への視座

本稿では、「ひきこもり」当事者のかかえる葛藤感覚を対象関係論から捉えなおすことを試みてきた。かれらは、ひきこもった当初から、あるべき姿と乖離する自分への否定的な感覚や苦悩をかかえていた。それは、対人関係を獲得し就労を果たした後も継続して感じられており、かれらにとって「ひきこもり」という経験を語る際の中核に位置づいていた。本稿ではこの苦悩を支配的対象関係に抑圧され責め立てられてきた状態として捉えている。一方、そのような支配的対象関係に圧倒されつつも、自らが主体的に生きることのできる新たな対象関係を構築しようとする動きが、当事者らの語りには垣間見られた。生き方・働き方をめぐるかれらの葛藤や揺れは、支配的対象関係を放棄し新たな対

象関係に組み替えていく際の必然的な揺れとして捉えることができる。つまり、対象者らに見られた「ひきこもり」とは、支配的な内なる他者に圧倒される苦しみをかかえつつ、それに代わる共存的な対象関係を発見・構築していく過程として捉えられるのではないだろうか。とすれば、主体的・安定的に生きるあり方を支え励ますような対象関係を構築することこそが、長くかかえてきた葛藤から解放されることであり、「ひきこもり」からの〈回復〉と言えよう。

しかし、本稿で見てきたようにその過程は容易ではない。発達過程において子どもは外的対象関係を縮約して内的対象関係をつくりだすが、形成された支配的な対象関係を解体・再編する基地としての友人関係は今日その機能を果たしづらくなっている。竹内（1987）は、問題行動や対人関係のトラブルを激発させながらも、親密な友達を原像にして、支配的な他者に代えて共存的な他者を根付かせていく子どもたちの様子を1980年代当時描いたが、そのような解体作業の基地となりうる対象の獲得は、Cさんに見たように今日非常に難しくなっている。

とすれば、新たな対象関係構築という〈回復〉に向けて支援機関が担える支援のあり方は次のようなものとなるだろう。まず、対象関係組み替えの新たな対象となりうるモノ・コト・人への出会い・体験を保障することである。“こうあるべき”という支配的な対象関係を強化する対象ではなく、本人の主体性を求め、共存的・相互的な対象関係を体現する支援機関・支援者でありたい。これまで取り込み―投射―取り込みのなかで支配的な内なる他者を強化してきている当事者らは、他者のもつ期待や思惑に敏感である。安易な就労への駆り立ては、当事者らの葛藤の源泉にある支配的対象関係を強化するのみでその緩和に結びつかないことはまずもって念頭に置かれるべきである。

また、そのような出会いや経験を保障するだけでなく、その意味づけをおこなう場も重要であることが、支援実践の検討から明らかにされた。日常生活のなかでの感覚を言葉にすることが新たな感覚の発見へとつながり、新たな自己物語を立ち上げる契機となる。その際、似た立場にある者と語りを共有することも重要となろう。自分一人ではなく仲間と共に問うという営みにおいてかれらは孤立無援感を打破し、また、その仲間との関係が主体的に生きられる対象関係の構築を後押しする。対象関係組み替えの過程は、対象者らに見たように強い揺れや葛藤を伴うものであるが、支援者は、それを必然的一過程として捉え、長期的な視野の下でその過程を支えることが求められる。

以上の知見は支援方法の一つとして近年多く展開されているフリースペースへの可能性を示唆するものとなるだろう。時に活動に始終しがちなフリース

ペースを、共存的な対象関係を発見し、支配的な対象関係を組み替える際の拠り所となるような場として、意識化・組織化していくことが重要となろう[13]。また、思いや感覚を言葉にし、仲間と共有していく場を用意することも必要である。ただし、「ひきこもり」の者たちの居場所においては「苦痛、当惑、屈辱になるような問題を会話に持ち込まないよう」注意を払う回避儀礼が徹底されている（荻野 2007）。そうした回避儀礼の徹底は他者との会話に乗り出しやすく、その会話の成立が承認感覚を与える一方で、自己開示を避ける限りにおいて十分な承認は得られず、自己物語のリアリティも失われてしまうといった両義性をかかえてきた。回避儀礼による安心感を担保しつつ、思いや語りを共有できる場を作っていく際の方法として、語る会というフリースペースの外に設けられた実践は一つのあり方と言えるかもしれない。

試行錯誤が続く「ひきこもり」支援においては、今後、臨床を踏まえた理論的見地から支援実践への提言をおこなう研究の蓄積がますます求められるだろう。社会学、社会福祉学、心理学等様々な領域によって担われつつある「ひきこもり」研究において、教育学が担うべき重要な役割がそこにはあると思われる。

【註】

(1) たとえば、厚生労働省による地域若者サポートステーション事業（2011年度は全国に110ヶ所）では、NPO団体が多く選定されている。サポートステーションは職業的自立支援機関とされ、「ひきこもり」支援を明確に謳ったものではないが、実際には「ひきこもり」状態にある若者が多く利用し、その支援が展開されている。

(2) 何らかの“介入”をおこなうことによる〈回復〉への圧力が根強い今日、“何もおこなわない”ことが当人への支援となりうる時期もあると思われる。支援の可能性を探るといった際には、そのような判断も含めて支援者にどのような姿勢が求められるのか検討することが肝要であろう。

(3) 残りの1名は途中で団体Z以外の機関にかかわることになり語る会への参加を中断している。そのため、本稿において対象としていない。

(4) 「ひきこもり」をめぐっての定義は様々あるが、たとえば、精神科医ら複数の見解をまとめた塩倉（2003）は、「ひきこもり」を「青年期を中心に、対人関係から長期間身を引いた状態や社会的な活動に長期間参加しない（できない）でいる状態」としている。

(5) なお、Bさんの対象関係を論じるにあたっては、中学でのいじめられ経験と不登校の影響を無視することはできないであろう。いじめによってかかえこまされた「人に対する怖さ」は、長きにわたって他者との関係を取り結ぶ際の障壁となり、不登校は、親密な友達関係を拠り所に新たな対象関係を形成していくはずの時期に同年代とのかかわりを剥奪する結果を生んだ。Bさん自身がいじめられ経験を語る会で

あまり話さなかったため、これ以上の言及は難しいが、横湯（2002）や竹内（1987）では、いじめをめぐる対象関係形成の詳細が述べられている。

(6) 小学校高学年頃から、Ｃさんは友達とケンカをしたことがないという。「自分が、嫌だと思ってることを、面と向かってその人に、言えない。怖い」というＣさんにとっての、辞めたいという意思表示の重みが見て取れる。なお、アルバイト先の工場は団体Ｚの紹介で入っており、Ｃさんの上司と団体Ｚは連携しながらＣさんの意思表示までの過程を支えていた。

(7) ブロスは、思春期・青年期の困難や行為を、早期幼児期からの問題点が露わとなって発達していく過程として捉えており、Ｃさんの支配的対象関係を組み替えていく「ひきこもり」の過程も同様に捉えられるだろう。ただし、強調しておきたいのは、竹内（1987）でも述べられているように、対象関係は、教育家族化や管理主義的な学校教育等、様々な社会状況にさらされるなかで形成されるものであることだ。よって、上記のように捉えた際にも、早期から形成されてきた対象関係の「問題点」は、決して個々の親や子のあり方に原因を帰せられる質のものではない。時代や社会の問題がいかに親や家庭という媒介を通じて若者に入り込んでいるかを見ることが重要である。

(8) ギデンズは、「不安は、主な養育者（多くの場合母親）からの分離の恐怖にその源がある。この現象は、幼児にとって、出現しつつある自己や、より一般的には存在論的安心の核を脅かすものである」と述べている。つまり、対象喪失という親からの分離を伴う対象関係の組み替えは、それ自体が存在論的不安を引き起こすものとしてあることがギデンズ自らによっても示唆されている。

(9) ネットゲームとは、ここではインターネットを介して複数の人が同時に参加し進めていくオンラインゲームのことを指す。チャット機能があり、会話ができるものも多い。

(10) 以上のことは、「真正面」から実存的な問題に向き合い、徹底的に問うこと自体の必然性と重要性を否定するものではない。

(11) 支援者との関係で言えば、先に見たＢさんのように、支援者への信頼感を土台にして支援者に映る自分像を受け入れることをきっかけに、同輩集団のなかでもこれまでと異なる自己を発見していく場合もある。同輩集団への入りがたさをかかえる当事者が少なくないことを踏まえれば、支援者との関係が媒介となりながら、同輩集団での関係性構築やそれによる対象関係の組み替えが促されていく可能性への視点は重要であろう。

(12) ただし、石川（2007）は「“どこかに〈回復〉と呼べる地点がある”という認識枠組みそのものを解体する必要がある」という視点から存在論的安心の確保という〈回復〉を設定しており、この問題にまったく無自覚というわけではないだろう。

(13) なお、規範を解きほぐす場としての機能に着目したものとして川北（2006）がある。

【参考文献】

Blos,P. 1962. On Adolescence: A Psychoanalytic Interpretation, The Free Press of Glencoe（野沢栄司訳『青年期の精神医学』誠信書房、1971 年）

Giddens,A. 1991. Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age, PolityPress（秋吉美都他訳『モダニティと自己アイデンティティ―後期近代における自己と社会』ハーベスト社、2005 年）

Herman,J.L. 1992. Trauma and Recovery, Basic Books, A Division of harper-Collins Publishers, New York（中井久夫訳『心的外傷と回復〈増補版〉』みすず書房、1999 年）
石川良子 2007『ひきこもりの〈ゴール〉―「就労」でもなく「対人関係」でもなく』青弓社
川北稔 2006「ひきこもり支援の課題と展望―社会規範を解きほぐす居場所の実践から」忠井俊明・本間友己編『不登校・ひきこもりと居場所』ミネルヴァ書房、240-260 頁
工藤宏司 2008「揺れ動く「ひきこもり」―「問題化」の過程」荻野達史他編『「ひきこもり」への社会学的アプローチ―メディア・当事者・支援活動』ミネルヴァ書房、48-75 頁
中西新太郎 2009『〈生きづらさ〉の時代の保育哲学』ひとなる書房
野口裕二 2005『ナラティヴの臨床社会学』勁草書房
荻野達史 2007「相互行為儀礼と自己アイデンティティ―『ひきこもり』経験者支援施設でのフィールドワークから」『社会学評論』58 集 1 号、2-20 頁
塩倉裕 2003『引きこもり』朝日新聞社
竹内常一 1987『子どもの自分くずしと自分づくり』東京大学出版
横湯園子 2002『教育臨床心理学』東京大学出版